

大開遺跡・新田遺跡

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2005年3月

青森県教育委員会

序

大開遺跡は八戸市の南東部、八戸工業大学のキャンパスを間近に望む丘陵地に所在します。当センターでは八戸南環状道路の建設に先立ち、平成15年度に発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代の溝状土坑等が検出され、縄文時代は狩猟の場として用いられたことが明らかとなりました。

また、新田遺跡は、八戸市の南部に位置し、有名な是川石器時代遺跡に近接しています。地域的な重要性に鑑み、当センターでは八戸南環状道路の建設事業に先立ち、平成10年度に試掘調査を実施しました。その結果、縄文時代、中でも早期・中期を主体とする各時期の遺物が出土し、遺構も存在することが明らかとなりました。平成15年度には、当該区域の設計変更をうけ、調査対象区域を広げて本調査を実施しました。この調査では、縄文時代草創期～晚期の遺物を検出し、長期にわたる人間活動の痕跡を確認しました。

本書は平成15年度の大開遺跡と平成10・15年度の新田遺跡の調査成果をまとめたものです。本書は地域の歴史を後世に伝える基礎資料の一つであります。今後、歴史教育の場で活用され、次の世代の育成に幾分かでも貢献できるなら幸いです。

最後に、調査の実施から報告書の刊行に至るまで、御指導・御協力を賜つた関係各位に対し、厚くお礼を申し上げる次第です。

平成17年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 佐藤 良治

例言

- 1 本報告書は、八戸環状道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 15 年度に発掘調査を実施した大開遺跡と平成 10・15 年度に発掘調査を実施した新田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 執筆者の氏名は文末に記した。また、出土した石器の石質鑑定は佐々木辰雄氏（八戸中央高校教諭）、一部を島口天氏（青森県立郷土館）に依頼した。
- 3 本報告書に掲載した遺跡位置図には、国土交通省国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図『八戸東部』・『苦米地』を使用した。
- 4 基本層序及び遺構の土層注記には、小山忠正・竹原秀雄『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務室監修 1997・1998 年）を使用した。
- 5 本書を編集するにあたり、下記の諸氏にお世話になった（順不同 敬称略）。
小林謙一、小松隆史、小松有希子

凡 例

- 1 遺構の表記は、青森県埋蔵文化財調査センターで定めた下記の略号を使用している。

S B	掘立柱建物跡	S D	溝跡	S E	井戸跡	S I	住居跡
S K	土坑	S N	焼土遺構	S R	土器埋設遺構	S T	捨て場
S V	溝状土坑	S X	その他の遺構				
- 2 挿図中の北方位は、座標北である。
- 3 測量法の改正により経緯度の記載方法が旧日本測地系から日本測地系 2000 に変更となったため、抄録では両者の数値を併記しているが、挿図・本文は全て旧日本測地系を使用している。
- 4 挿図のうち遺構図の縮尺は、各挿図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。
遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器 : 1/3	剥片石器 : 1/2	礫石器 : 1/4	陶磁器 : 1/3
----------	------------	-----------	-----------
- 5 挿図中で用いたスクリントーンは次のとおりである。

タタキ	[■]	スリ	[■]
-----	-----	----	-----
- 6 繩文原本の基本的な分類は『日本先史土器の繩文』（山内清男、1979 年）に従ったが、観察表中ではその名称を一部略記した場合がある。
- 7 写真図版の縮尺は不同である。

目 次

序

例言・凡例

目次

第1編 調査の概要

第1章 調査の概要	2
第1節 調査にいたるまでの経過	2
第2節 調査要項	2
第3節 調査の経過	3
第2章 周辺の地形・地質	7

第2編 大開遺跡

第1章 遺跡の層序	10
第2章 検出遺構	14
第3章 出土遺物	25
第4章 まとめ	28
写真図版	31

第3編 新田遺跡

第1章 遺跡の層序	36
第2章 検出遺構とその出土遺物	38
第3章 遺構外出土遺物	45
第4章 まとめ	52
写真図版	53

抄録

奥付

第1編

調査の概要

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたるまでの経過

平成7年度に、建設省青森工事事務所（現国土交通省青森河川国道事務所）から、八戸南環状道路建設事業の実施計画に伴い、予定地内に所在が予想される遺跡の取り扱いをめぐって、県教育庁文化課（現文化財保護課）に照会がなされた。そこで、路線内を関係者で踏査した結果、まず分布・試掘調査を先行させ、発掘調査の条件が整った遺跡から順次、当センターが調査を行うこととした。工事の優先箇所の都合上、翌平成8年度の弥次郎窪遺跡から調査を開始し、平成10年度から13年度までに、丹内・蟹沢（2）・新田・渴野・黒坂・松ヶ崎・蟹沢（3）・横館遺跡の調査を行った。

今回報告する大開・新田両遺跡のなかで、新田遺跡に隣接する予定地が、国史跡・是川遺跡に近いことから、是川遺跡が予定地に延びていることが懸念されたため、平成10年度になって、急きょ4月17日にセンターを含めた三者で現地協議を行い、9月24日～10月30日に、西側に隣接する渴野遺跡とともに未買収地を除いた区域の調査を実施した。調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が発見されたが、是川遺跡とは年代が異なっており、双方の関連性はないものと判断された。

その後、この予定地内では、平成14年9月に、青森河川国道事務所・文化財保護課・当センターの三者で現地踏査及び調査打合せを行ない、大開遺跡を、翌平成15年4月15日～5月30日、新田遺跡を同年8月1日～10月23日に調査を実施することになった。
(福田 友之)

第2節 調査要項

- 1 調査目的 八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち、当該区域に所在する大開遺跡・新田遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存し、地域社会の文化財の活用に資する。
- 2 調査期間 大開遺跡 平成15年4月15日から同年5月30日まで
新田遺跡 平成10年9月24日から同年10月31日まで
平成15年8月1日から同年10月23日まで
- 3 遺跡名及び 所在地 大開遺跡（青森県遺跡台帳番号 03177）
八戸市大字妙字大開9-24、外
新田遺跡（青森県遺跡番号 03141）
八戸市是川字新田8-6、外
- 4 調査面積 大開遺跡 3,400 m²
新田遺跡 平成10年度 1,016 m² 平成15年度 4750 m² (本書報告分)
- 5 調査委託者 青森県県土整備部
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査体制 平成10年度
調査指導員 市川 金丸（考古学 青森県考会会长）
調査協力員 卷 長悟（八戸市教育委員会教育長）

調査員 松山 力（地質学 八戸市文化財審議委員）
工藤竹久（考古学 八戸市教育委員会文化課主幹）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
所長 中島 邦夫
次長 成田 誠治
総務課長 成田 孝夫
調査第二課長 福田 友之
文化財保護主事 中村 哲也 斎藤 正

平成 15 年度

調査指導員 市川 金丸（考古学 青森県考古学会会長）
調査員 松山 力（地質学 八戸市文化財審議委員）
調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
所長 佐藤 良治
次長 福田 友之
総務課長 工藤 和夫
調査第二課長 成田 澄彦
文化財保護主査 中村 哲也
文化財保護主事 岩田 安之

第3節 調査の経過

大開遺跡

〔野外調査の方法〕 グリッド法による分層発掘を実施した。トレンチの位置を把握するため、公共座標に合わせて 4m 四方のグリッドを設定し、現地には 20m 毎に杭を打設した。グリッドラインは北から南に向かってアルファベットで A、B…Y、AA、AB…のごとく、西から東に向かって算用数字で 0、1、2、3…のごとく表記した。グリッドライン交点は南北ライン名と東西ライン名をハイフンでつなぎ、これを呼称とした。グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の呼称をもって代表させた。グリッド起点（交点名 A-0）の公共座標値は、X=53,220 Y=61,500 である。表土は人力による掘削と重機による掘削を作業の進行状況により適宜選択した。表土以下は人力で掘削を行った。遺構外の基本層序はローマ数字を用い、上から順に命名した。遺構内の層序は算用数字を用いた。遺構の実測は、簡易遺り方測量とトータルステーションによる実測を併用した。写真撮影は 35mm カメラでカラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムを用い、補助的にデジタルカメラを用いた。

〔調査経過〕 4月 15 日、機材搬入。試掘調査は実施されていなかったので、トレンチを設定して遺構・遺物の分布状況を把握し必要に応じて調査区域を拡張することとした。用地内の座標データの入手が遅れたためトレンチの位置は任意に設定した。用地中央部をほぼ東西・南北に四分割する道路の南東部から調査に着手した。人力で掘削を行い、溝・溝状土坑を確認した。4月 30 日からは遺構の検出された範囲を中心に、重機による表土除去・人力による掘削を進めたが、遺構・遺物とも密度は薄く、道路北東側では全く検出されなかった。そのため、道路北西側は調査不要と判断された。5



図1 新田遺跡位置図



図2 大開遺跡位置図

月 30 日、調査を終了した。

〔整理作業の方法〕 遺構はコンピューター上でトレースを行った。遺物はコンピューター上に重量等記録し、遺跡で計測した 3 次元位置情報とあわせて台帳を作成した。その後実測を行い、すべてドロー系ソフトやスキナーを用いてデジタル化した。編集は Adobe 社製の In Design CS を用いて行った。

新田遺跡

〔野外調査の方法〕 平成 10 年度の新田遺跡の調査は、主に遺構・遺物の分布範囲と内容を把握することを目的として、グリッド法による分層発掘を実施した。公共座標に合わせて 4m 四方のグリッドを設定し、現地には 20m 毎に杭を打設した。これに沿って幅 2m のトレーナーを設定し、適宜拡張することとした。グリッドラインは北から南に向かってローマ数字とアルファベットの組み合わせで I A、I B… I Y、II A、II B…のごとく、西から東に向かって算用数字で 0、1、2、3…のごとく表記した。グリッドライン交点は南北ライン名と東西ライン名を - でつなぎ、これを呼称とした。グリッド名は南西隅のグリッドライン交点の呼称をもって代表させた。グリッド起点（交点名 I A-0）の公共座標値は、X=53,000 Y=55,000 である。遺構は、基本的に確認にとどめる方針であったが、一部の遺構は時期・性格を把握する目的で完掘した。遺物はグリッド単位で層毎に取り上げた。写真撮影は 35mm カメラで、カラーリリヴァーサルフィルム、モノクロネガフィルム、カラーネガフィルムを用いて撮影した。

平成 15 年度の調査は平成 10 年度の調査方法に準じたが、遺物はトータルステーションにより 3 次元の位置を記録して取り上げた。また、写真撮影は大開遺跡の方法と同様なので、繰り返さない。

〔調査経過〕 平成 15 年 8 月 1 日機材を搬入。職員 1 人、作業員 40 人の体制で調査を開始した。平成 10 年度調査で縄文時代早期の SK-01 が検出された II F ~ II U-150 ~ 165 を中心に粗塙を開始した。周辺は畑地造成のため、北半では黄褐色土まで削平を受けていたため作業の進行状況にあわせて、人力による掘削と重機による表土除去を適宜選択した。SK-01 の堆積土は地山との識別が困難であったため、遺構の検出作業も黄褐色土を相当深度まで掘削する必要があった。そのため、遺構・遺物の数量の割に掘削作業に手間取った。8 月 27 日には糠塚大開 (2) 遺跡から職員・補助員・作業員が合流し、通常の体制に移行した。9 月からは、120 ~ 135 ラインの調査に着手したが、遺物が少量出土したのみであった。10 月には 125 ライン以西の調査に着手し、遺物の取り上げとともに遺構検出作業を行い、複数の遺構の存在を確認し調査を終了した。この区域の報告は平成 16 年度の調査結果とあわせて報告する予定である。

〔整理作業の方法〕 平成 10 年度調査で検出された遺構・遺物、平成 14 年度調査で検出された遺構・遺物のうち、120 ライン以東・II E ライン以北のものを報告対象とした。方法は大開遺跡と同様であり、ここでは繰り返さない。

(中村)

第2章 周辺の地形・地質

八戸市域には北から順に、十和田湖及びその外輪山に源を発する奥入瀬川、五戸川、浅水川、岩手県七時雨山・早坂高原付近に源を発する馬瀬川、平庭岳に源を発する新井田川が流れしており、これらの河川とその支流によって形成された段丘地形が発達している。八戸市西部から北部では、高位の段丘から順に、蒼前平段丘、天狗岱段丘、高館段丘、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている。地域によっては更に細分され、あるいは異なる名称が与えられており、新井田川と太平洋に挟まれた階上岳山麓線以北の地域では、高位から蒼前平高位段丘・蒼前平低位段丘（蒼前平段丘相当）、白銀段丘・野場段丘（天狗岱段丘相当）、種市段丘（高館段丘相当）、根城段丘、田面木段丘、名久井段丘に区分されている¹⁾。

大開遺跡は、新井田川と太平洋に挟まれた地域、馬渡川の東岸に所在する。標高は約100mで、緩やかな起伏をもった白銀平段丘面が広がる。馬渡川に向かって傾斜する谷が遺跡の東縁に発する。白銀平段丘の表層は、下位から天狗岱火山灰、高館火山灰、八戸火山灰の最新世火山灰が堆積し、更に完新世の火山灰と黒色土が乗る。完新世火山灰は、青森県南地方では二ノ倉火山灰層（縄文時代草創期～早期）、南部浮石層（8,600 ± 250B.P.）²⁾、中撒浮石層（縄文時代前期中葉）³⁾、十和田b降下火山灰層（縄文時代晚期終末～弥生時代）、十和田a降下火山灰層（10世紀前葉）、白頭山火山灰層（10世紀前葉）が知られている。二ノ倉火山灰層は八戸市域の発掘調査では断片的に認められる場合がある（青森県教育委員会 1999）。南部浮石層・中撒浮石層・十和田b降下火山灰・十和田a降下火山灰・白頭山火山灰層は、八戸市域では一般に成層状態ではなく、窪地や谷地形にみられる場合がある。大開遺跡では後述するように、成層状態で確認された完新世火山灰はない。

馬渡川流域の基盤岩は、通産省工業技術院地質調査所発行の1:200,000地質図（平成3年発行）によれば石灰岩、粘板岩及び砂岩、チャートであり、遺跡の東方約5kmの種差海岸にデイサイト・流紋岩溶岩及び火碎岩が、南方約7km階上岳には角閃石黒雲母閃綠岩がある。また、3～4km西方の新井田川・松館川流域の一部に苦鉄質火山岩がみられる。

新田遺跡は新井田川の左岸に位置する。標高15m前後から90m前後まで複数の段丘面を含む広大な範囲が遺跡として登録されているが、平成10・15年度の調査対象区域は標高15～24m前後の田面木段丘面である。八戸市立団南小学校の南方約1kmの地点から新井田川に流れ込む小枝谷が遺跡の西方から南方を限っている。田面木段丘は段丘疊層上に八戸火山灰層と完新世堆積物を乗せるが、完新世火山灰は成層状態では確認されていない。遺跡周辺の基盤岩は上述の1:200,000地質図によれば粘板岩及び砂岩、泥岩・砂岩・及び礫岩、輝石安山岩溶岩及び火碎岩である。新井田川の右岸には苦鉄質火山岩・石灰岩がある。

(中村)

1) 松山力 1983 『八戸の地質』八戸市教育委員会

2) 大池昭二・中川久夫 『1978年度地質調査報告書』東北地方農政局計画部に記載された南部浮石の14C年代による。初出は『地球科学24-6』。

3) 青森県南郷村畠内遺跡では、円筒下層a式包含層直下で中撒浮石層が検出されている。

青森県教育委員会 1997 『畠内遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第211集

4) 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集

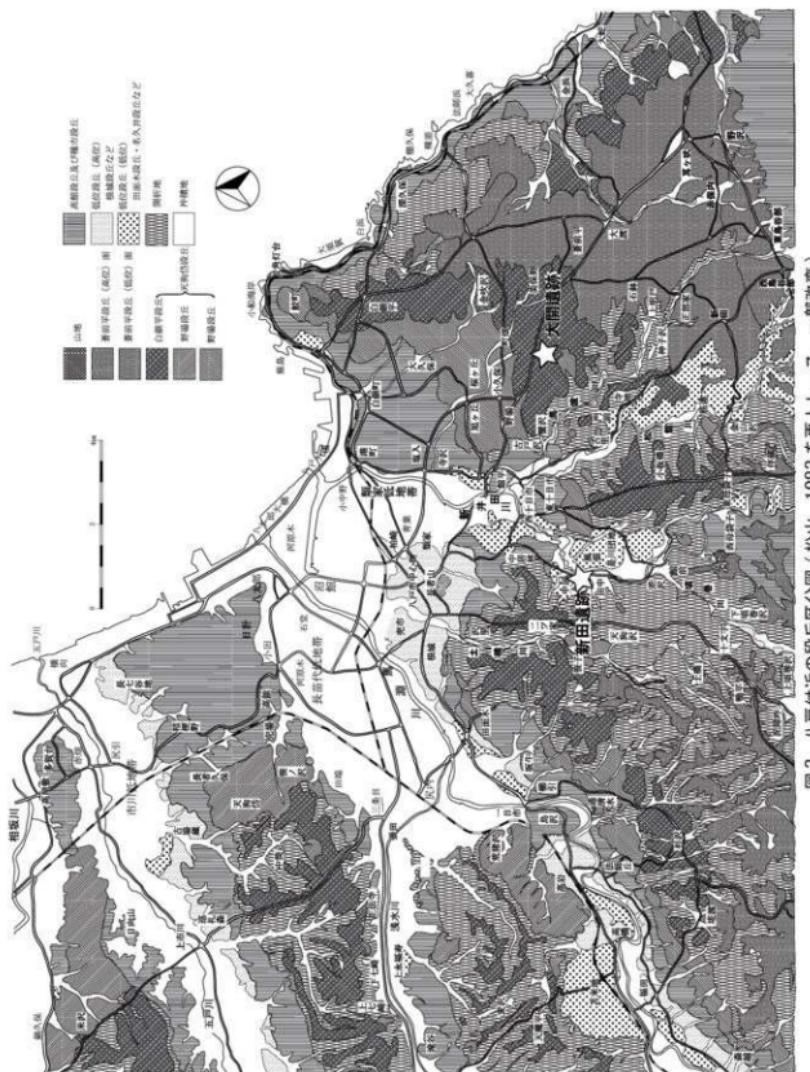


図3 八戸付近の段丘区分図(松山 1983を再トレース 一部改変)

第2編

大開遺跡

第1章 遺跡の層序

大開遺跡は八戸市の南東部、白銀平段丘上に位置する。遺跡の南側は馬渡側に向かって緩やかに傾斜する斜面となっており、南東部には馬渡川につながる枝谷がある。調査区をのせる段丘面は緩やかな起伏をもって、北側に向かって高度を減じている。

調査区付近の地形をやや微視的にみると、調査区の南西部に馬渡川へ続く谷が西南西・東北東方向に認められる。この谷は調査区内では極めて微弱になり南側と北側に東西にのびる尾根地形がある。谷底部との比高差はどちらも2m程度である。北側の尾根は調査区中央を東西・南北に走る道路を頂点として、北側に向かって傾斜する緩斜面となっている。

遺跡の基本層序は、地形を反映した土層の厚薄が予想されたので、北側斜面のAS-44 グリッド、微弱な谷地形底部のX-28 グリッド、調査区南部のN-28 グリッドで観察した。

第I層 10YR2/1 黒色シルト 表土。しまりない。十和田b降下浮石を1%程度含み、草木根が顕著である。

第II層 10YR1.7/1 黒色シルト 十和田b降下浮石2%含む。

第IIIa層 10YR1.7/1 黒色シルト 第II層に比べてしまっている。十和田b降下浮石は含まない。土層の粒径が粗く、ザラザラした感触がある。黄褐色の微細な粒子が認められ、中振浮石を母材の一部としているものと考えられる。

第IIIb層 10YR2/1 黒色シルト 第IIIa層に比べて、黄褐色の微細な粒子が多くみられる。

第IVa層 10YR2/1 黒色粘土質シルト かたくしまっている。φ 3mmの黄褐色浮石2%含む。

第IVb層 10YR2/1 黒色粘土質シルト かたくしまっている。φ 3mmの黄褐色浮石15%含む。層序から考えて、この浮石は南部浮石と考えられる。

第Va層 10YR3/3 黒褐色シルト かたくしまっている。φ 3mm～1cmの黄褐色浮石を2%含む。浮石は第VI層起源と思われる。

第Vb層 10YR4/1 暗色シルト かたくしまっている。

第VI層 八戸火山灰層である。

第VIa層 10YR5/6 黄褐色～10YR6/4 にぶい黄橙色浮石。八戸火山灰第VI層。

第VIb層 10YR6/3 にぶい黄橙色火山灰。八戸火山灰第V層。

第VIc層 10YR6/6 明黄褐色浮石。八戸火山灰第III層。

第VID層 10YR7/4 にぶい橙色火山灰。八戸火山灰第III層。

第VIe層 10YR6/6 明黄褐色浮石。八戸火山灰第II層。

第VIf層 10YR8/3 浅橙色火山灰。八戸火山灰第I層。

第VII層 7.5YR4/6 暗色火山灰。風化の進んだ粘土質の火山灰層で、最上部にチョコレート色の暗色帯が1cm程度の厚さで認められる。高鎧火山灰層。

B地区では畑地造成のため削平を受けており、第II～IV層までが消失していた。第III層はA地区では堆積状態が良好であったが、B地区・C地区はA地区に比べて黒色土の堆積が薄く、第III層は細分

できなかった。遺構の検出面は第Ⅲ層～第V層である。遺物の包含層は第Ⅲ層である。第Ⅳ層以下は遺構・遺物の検出が期待されなかつたため調査を行わなかつた。

(中村)

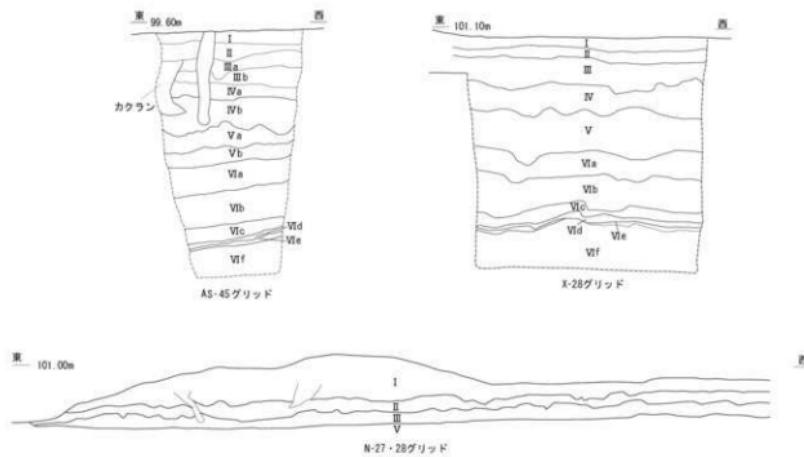


図4 大開遺跡基本土層



図5 大規模調査区位置図 (S=1/3,000)

第2章 検出遺構

本遺跡で検出された遺構は溝状土坑5基、溝跡2条である。溝状土坑は北側尾根部に4基、南側尾根部に1基が分布する。北側尾根部の4基はいずれも長軸が南東の谷部を向いている。

第1号溝状土坑〔SV-01〕(図7)

〔位置〕AC～AD-32・33グリッドに位置する。

〔確認〕周辺は削平されており、第V層で確認した。

〔規模〕底面で長軸3.82m、幅0.16m、確認面からの深さ1.44mである。

〔堆積土〕短軸方向で9層に分層した。十和田b降下浮石を含む土層は認められない。第4層以下には壁の崩落土と考えられる黄褐色浮石が認められる。上部の第3層までは黒色のシルトで、土質は第III層に類似する。このような堆積状況から、本遺構は、壁の崩落と、黒色土の崩落あるいは流入によって下部が埋没し、崩落がおさまったのち、上部に黒色土が堆積したものと思われる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕堆積土の様相から十和田b浮石が降下する以前と考えられ、黒色土の土質が第III層に類似することから、中振浮石降下以後の所産と考えられる。 (中村)

第2号溝状土坑〔SV-02〕(図7)

〔位置〕M-21グリッドに位置する。

〔確認〕第V層で確認した。

〔規模〕底面で長軸2.42m、短軸0.06～0.20m、確認面からの深さ1.48mである。

〔堆積土〕長軸方向で79層に分層された。上部は十和田b浮石を含まず、第III層に類似した黒色シルトが多く、下部には壁の崩落土と考えられる黄褐色土や浮石が認められる。これらのことから自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕堆積土の様相から、十和田b浮石降下以前、中振浮石降下後と考えられる。 (中村)

第3号溝状土坑〔SV-03〕(図8)

〔位置〕AA-34～35グリッドに位置する。

〔確認〕第V層である。

〔規模〕上端の規模で長軸×短軸×深さは、415×85×130cmである。

〔堆積土〕上から1～4段階の堆積に分けることができる。

第15層は、この遺構が最初に埋まるときの堆積層で、八戸火山灰第IV、第VI層の崩落土と砂っぽい土が混じり合って堆積していた。

第3～14層は基本層序第V層と八戸火山灰第VI層崩落土が主体である。基本層序第V層の大きな崩落は下層に集中し、上層は基本層序第V層の細かな崩落土である。第V層崩落土間に八戸火山灰第VI層の崩落土が堆積する。SV-03上部壁は凸凹で、上部ほど壁の角度が緩くなり、外側へ開く形状

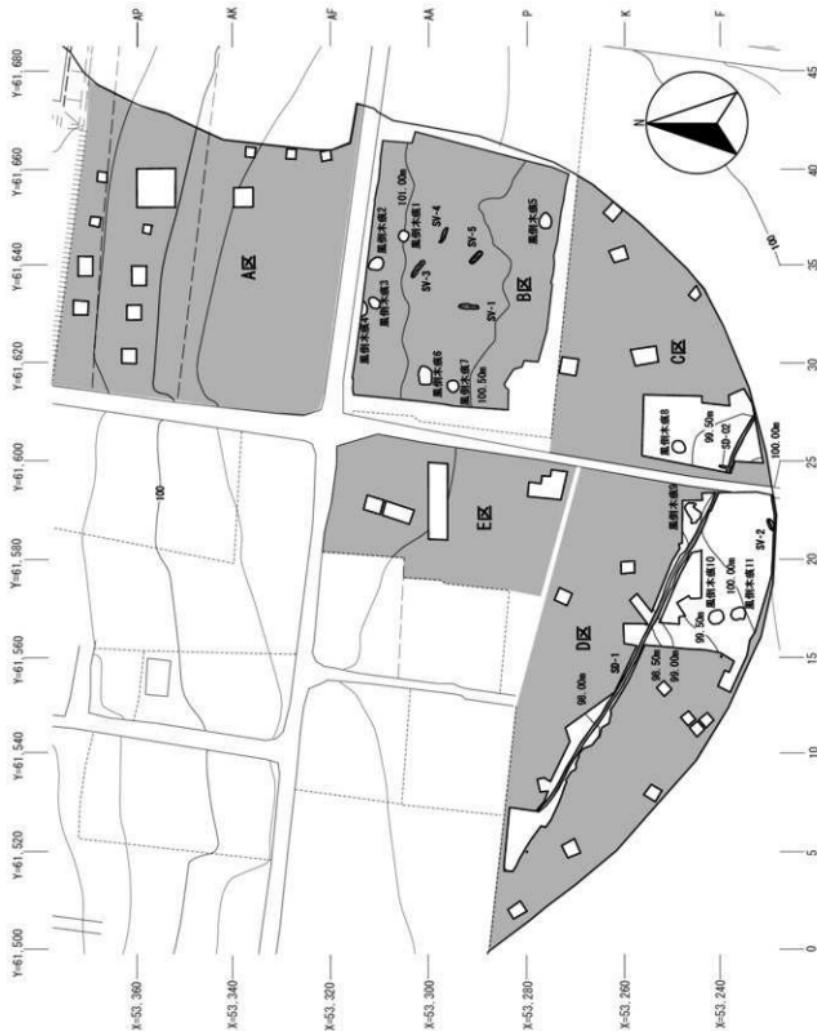


図6 大開遺跡遺構配置図 (S=1/1,000)

であることから、崩落は上部壁の崩落が中心で、第3～14層がその崩落土層である。

第2層は黒褐色土層である。第V層壁崩落土が少量混じる。平面的な崩落土分布の観察から、壁際に崩落土を多く含むことが確認された。当然ではあるが壁からの崩落土であれば壁際に分布する。

第1層は黒色土層である。第V層壁崩落土がほとんど混じらない。

第1、2層は基本層序III層に類似した層であるため、SV-03周辺の第III層が堆積する時期に同時に埋まっていたと推測される。第1、2層の違いは、第2層は基本層序第V層の崩落土が混ざり、第1層はそれがほとんど混じらないことである。第2層堆積最終時には遺構の壁上部まで埋まっていたため、第1層では崩落土がほとんど混じないと推測される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕第3号・4号・5号溝状土坑とも同様の堆積状況であることが確認されている。最終的に、遺構上部に基本層序第III層類似層が自然堆積するというものである。よって、遺構周辺の第III層堆積時に自然に埋まったといえる。さらに、これらの遺構内への堆積は、下部の崩落土と上部の堆積には時間差がなく、比較的短期間に埋まつたと推測される。よって第III層時に営まれた遺構であるとすることができる。さらに堆積土には、十和田b火山碎屑物を含む第II層がまったく確認されないことから、第II層堆積時には埋まりきっていたということである。第III層が中振浮石を母材にしている層であるから、現在の年代観にあてはめると、これらの遺構は縄文時代前期中葉から晩期後葉までの時間的な幅の中でとらえられる。

(岩田)

第4号溝状土坑〔SV-04〕(図8)

〔位置〕T-36グリッドに位置する。

〔確認〕第V層である。〔規模〕上端の規模で長軸×短軸×深さは、340×75×115cmである。

〔堆積土〕堆積土は大きく1～4段階に分けることができる。

第20層は、この遺構が最初に埋まり始めたときの堆積層で、八戸火山灰第IV、第VI層の崩落土と砂っぽい土が混じり合って堆積していた。土の観察からSV-03の第15層とまったく同じ土色、土質であった。

第13～19層は基本層序第V層崩落土と基本層序第III層類似土との互層である。

第2～12層は第3号溝状土坑の第2層と同様の堆積パターンである。

第1層は第3号溝状土坑の第1層と同様である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕第3号溝状土坑と同様の縄文時代前期中葉から晩期後葉までの時間的な幅の中でとらえられる。

(岩田)

第5号溝状土坑〔SV-05〕(図9)

〔位置〕R-35グリッドに位置する。

〔確認〕第V層である。

〔規模〕上端の規模で長軸×短軸×深さは、353×88×93cmである。

〔堆積土〕第3号・4号溝状土坑と崩落のパターンはほぼ同様であるが、第5号溝状土坑は第3号・

4号溝状土坑よりも浅く、八戸火山灰第IV層まで掘り込んでいない。主な崩落土は八戸火山灰第VI層と基本層序第V層である。

〔底面〕北西部底面に小穴が確認された。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕第3号溝状土坑と同様の縄文時代前期中葉から晚期後葉までの時間的な幅の中でとらえられる。
(岩田)

第1号溝跡〔SD-01〕(図10)

〔位置と検出〕調査区南東部のD区で確認し、C区の調査が進むにつれ、西北西方向へと伸びることが判明した。C区では本遺構以外の遺構・遺物が検出されなかつたので20ライン以西は本遺構の検出・精査を目的とした調査を行った。Yライン付近で溝が一端途切れるが、これは重機により黒色土の除去を行っていたため掘りすぎたものである。ABライン以北は未買収地であったため、調査は実施しなかつた。調査区壁面の観察では第II層を掘りこんで構築されている。

〔規模〕幅は検出面で0.70mから1.40m程度、深さ0.40m程度である。調査区壁面では上端幅約3.0m、深さ約0.60mである。底面は緩やかな丸みをもっている場合が多い。硬化面等は確認できなかつた。

〔出土遺物〕縄文土器の小片が3片出土したが、いずれも流れ込んだものと考えられる。

〔時期〕時期を示す遺物が無いので、詳細は不明である。

〔性格等について〕遺跡南西部からAA-45ライン付近に続く谷を横断しており、付近には遺構もなく排水等の用途は考えにくい。放牧地等の区画の可能性も考えられる。一方で本遺跡の約1.5km西方の蟹沢(2)遺跡ではやはり遺構・遺物がほとんど分布しない区域に、尾根上を等高線に平行して走る溝が検出されており、堆積土から唐代から明代に鑄造された渡来銭が検出された。この渡来銭が蟹沢遺跡例の年代を確実に示すとはいえないが、遺構の時期が渡来銭の使用時期に近い可能性も否定できない。この溝は本遺跡の方向へ向かっており、本遺跡の溝もこれと関連する可能性を消極的にではあるが考えておきたい。
(中村)

第2号溝跡〔SD-02〕(図10)

〔位置と検出〕0-29グリッドの第V層上面で第1号溝跡から分岐する落ち込みを検出した。

〔規模〕上端幅約0.50m、長さ約1.7m、深さ0.12mである。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕第1号溝跡から分岐しており同時期と考えられるが、第1号溝跡・第2号溝跡とも時期を示す遺物が無く詳細は不明である。
(中村)

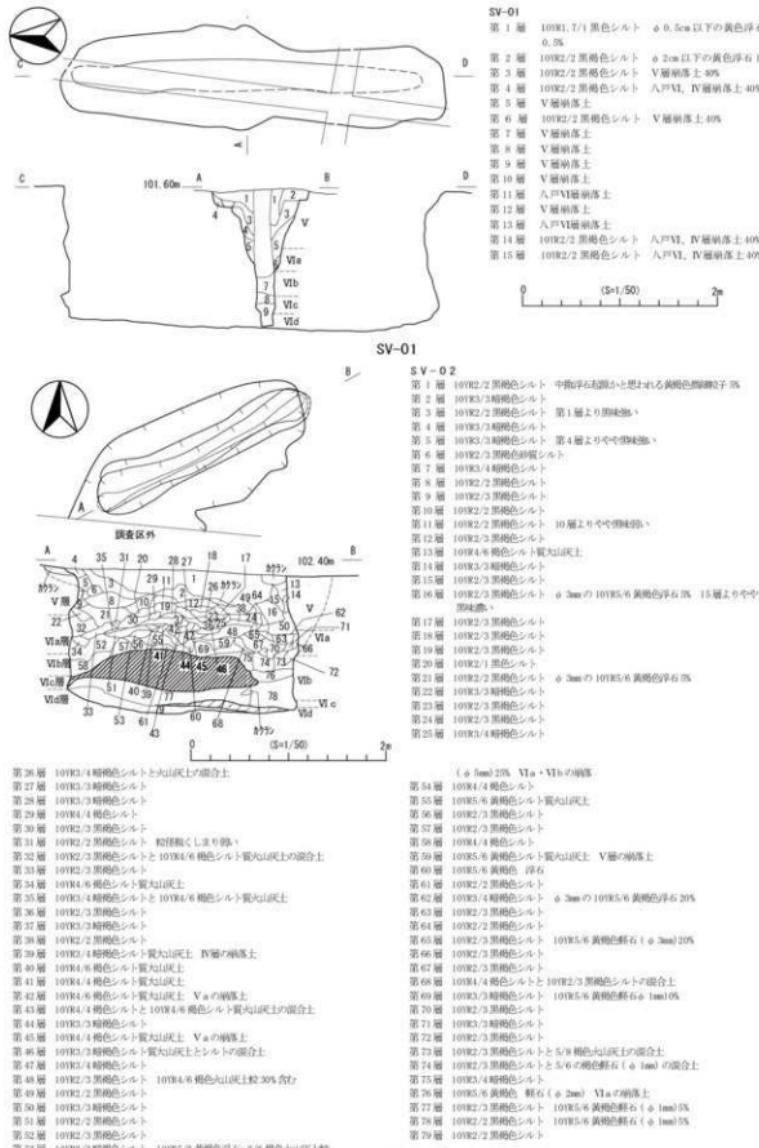


図7 第1号・第2号溝状土坑

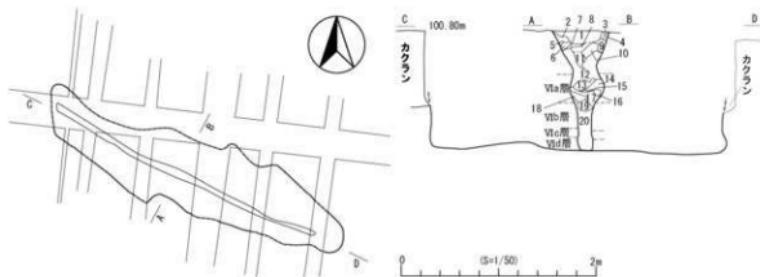
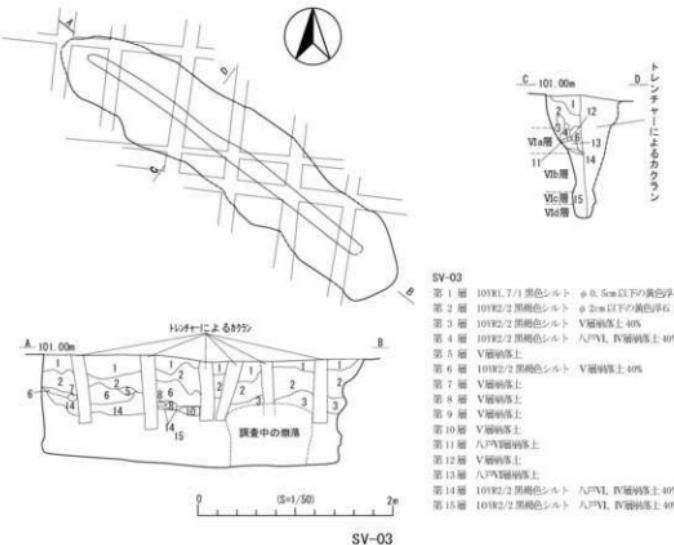


図 8 第3・4号溝状土坑

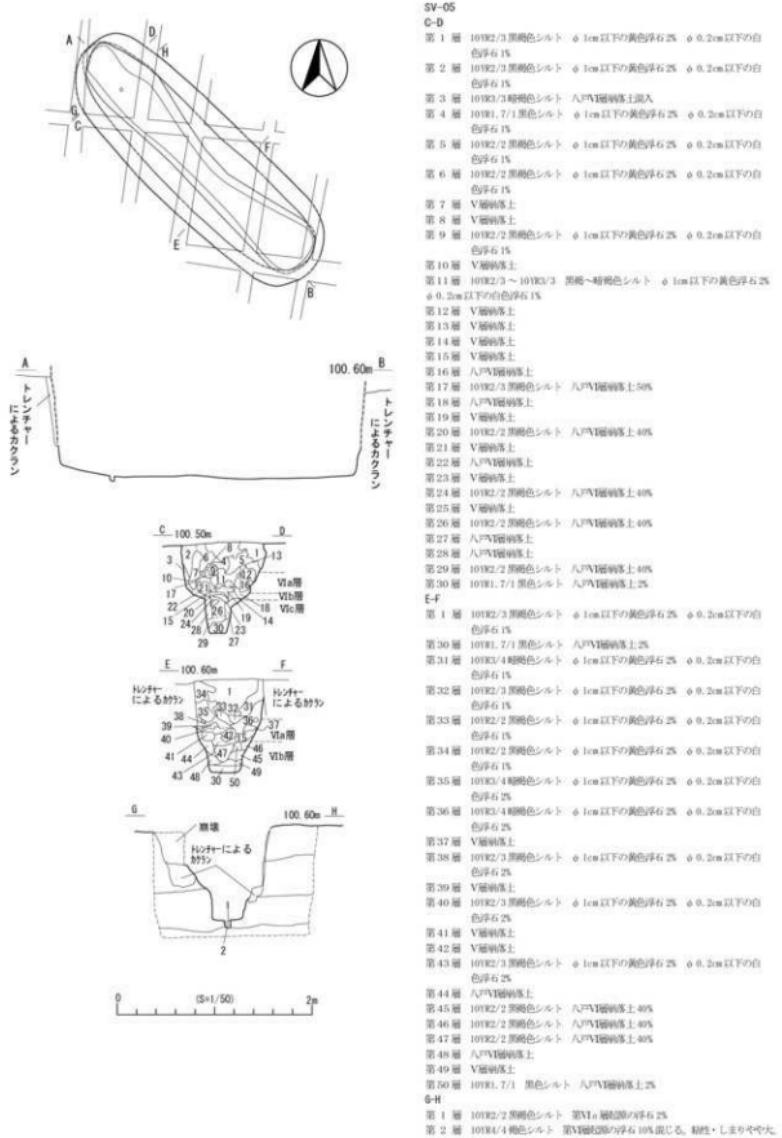


図9 第5号溝状土坑

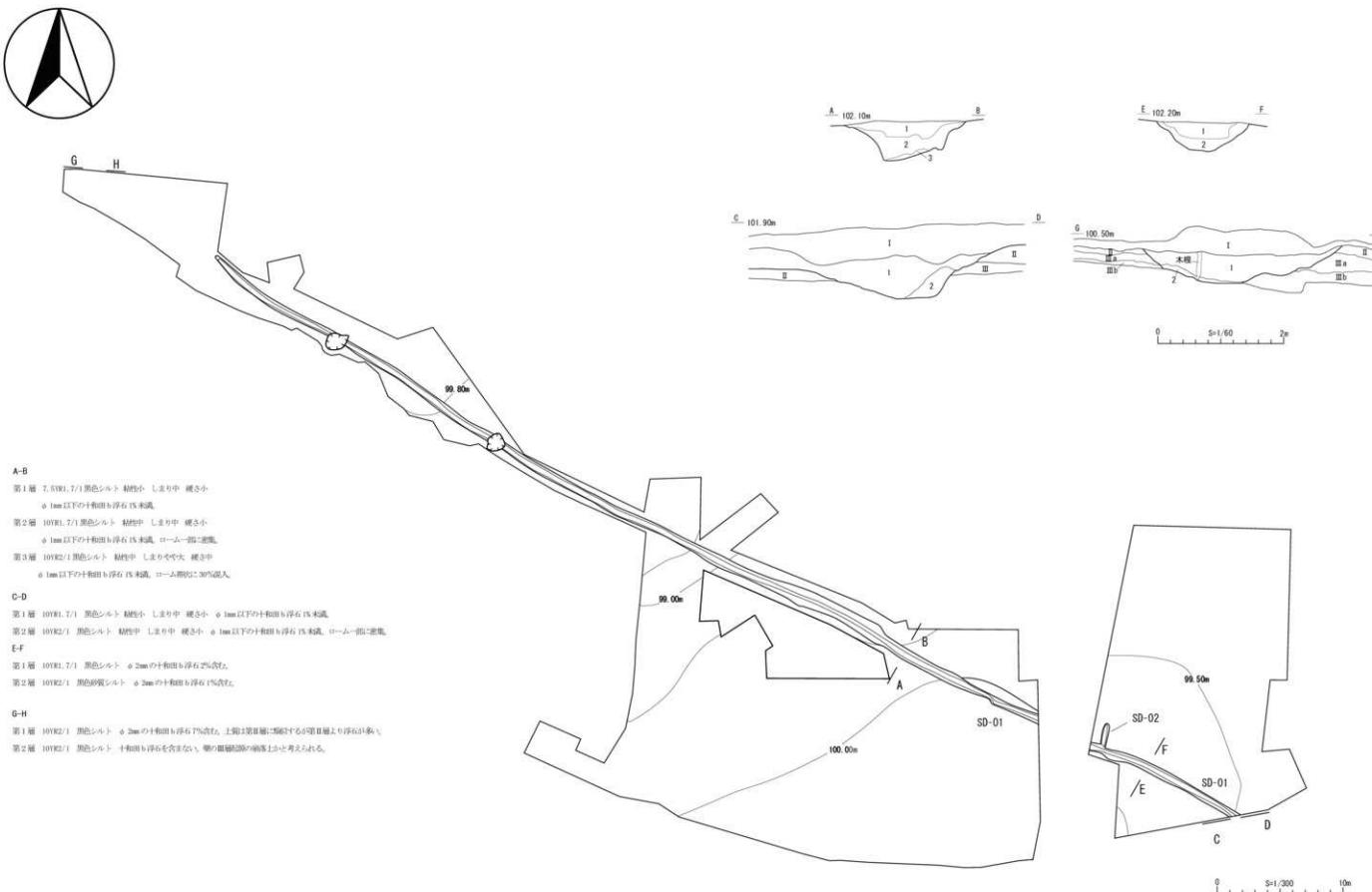


図10 第1・2号溝跡

第3章 出土遺物

本遺跡で出土した遺物は極めて少なく、段ボール箱1箱に満たない。A区で10片前後の土器が近接したグリッドから出土した以外は、ほとんど出土しなかつた。

第1節 土器（図11-1～22）

1～4は第1号溝跡から出土した。

1は、細密な縄文を斜位回転施文する壺形土器である。縄文時代晚期から弥生時代のものと思われる。2～4は無文地に沈線文を施すもので、十腰内I式に比定される。2は2本一対の沈線で平行線文と曲線文を施文する。3・4は口唇部に隆帯を貼り付けて肥厚させ、口縁に平行する沈線を巡らせている。肥厚帯の下位には、先端の丸い棒状工具で曲線文を施す。

5から22は遺構外から出土した。

5から10は十腰内I式に比定される。5～7は先端の丸い棒状工具を用いて曲線文を描くものである。9～10は木口状の工具で数本1単位の曲線文を施文する。

11は器厚7mm前後で、器面には粒度の粗い鉱物が目立つ。器外面には粗いLR縄文が施される。縄文時代中期前半のものと思われる。

12は器厚5mm前後で、11に比べて器面に鉱物は目立たず、粒径の細かい粘土が用いられている印象がある。外面にはRLR縄文が施される。13も12と粘土が類似し、器面には鈍い光沢が認められる。胎土から縄文時代中期後半のものと思われる。

16～21は器厚4～5mmで、非常に硬質である。外面には細かな縄文が施される。縄文時代晚期のものと思われる。

22は、16～21に比べると粗い縄文が施される。底面から1.5cm程度は無文である。胎土は12・13と類似し、これらと同時期のものと思われる。
(中村)

第2節 石器（図11-23～26）

遺構外出土石器として石鏃が4点出土した。無茎・凹基が3点、無茎・平基が1点である。K-19グリッド、H-23グリッドの第III層で石鏃各1点、AA-10グリッドの擾乱層で1点、排土から1点出土している。
(岩田)

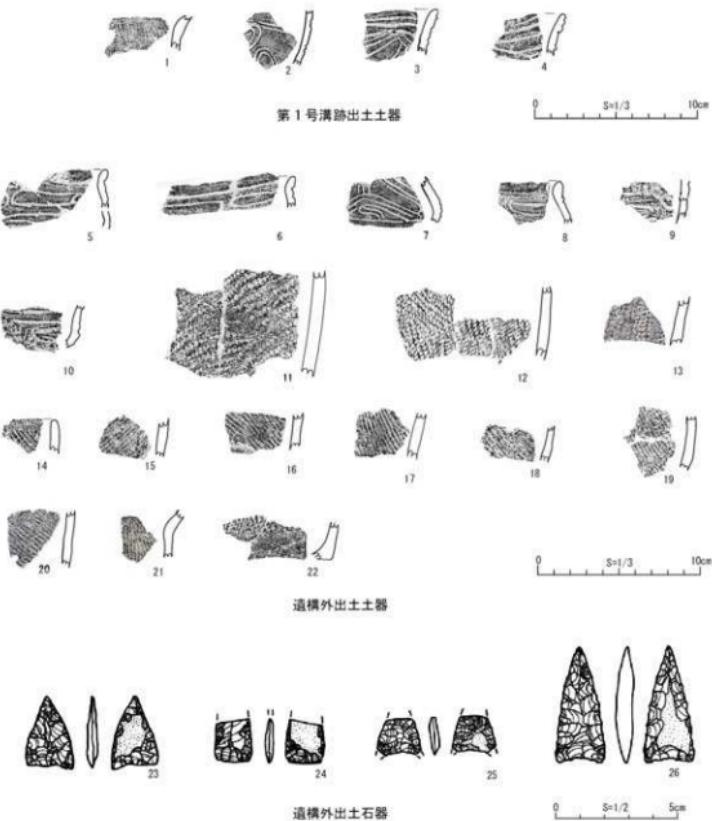


図11 出土遺物

土器観察表

番号	出土位置	出土層位	取上番号	X座標	Y座標	Z座標	重量(g)	外面		内面
								外側	内側	
国11-1	SB-01	1	F1	53234.415	61606.558	102.138	8.9	BL 斜位回転		ナデ
国11-2	SB-01	2	F2	53256.912	61561.224	100.644	5.1	沈縫		ナデ
国11-3	SB-01	2	F3	53256.725	61561.152	100.620	7.9	口縫部：隆帯貼り付け 沈縫		ナデ
国11-4	SB-01	2	F4	53258.217	61568.741	100.585	5.1	口縫部：隆帯貼り付け 沈縫		ナデ
国11-5	K-19	■		—	—	—	8.2	口縫部：隆帯貼り付け 沈縫		ナデ
国11-6	K-19	■		—	—	—	9.8	口縫部：隆帯貼り付け 沈縫		ナデ
国11-7	K-19	■		—	—	—	9.8	沈縫		ナデ
国11-8	風削木6	—		—	—	—	4.8	口縫部：隆帯貼り付け 木口状工具による沈縫		ナデ
国11-9	風削木6	—		—	—	—	3.9	口縫部：隆帯貼り付け 木口状工具による沈縫		ナデ
国11-10	風削木6	—		—	—	—	5.9	口縫部：隆帯貼り付け 木口状工具による沈縫		ナデ
国11-11	S-23	■		—	—	—	56.2	LR 斜位回転		ナデ
国11-12	AN-39	カクラン		—	—	—	22.7	BLK 斜位回転・斜位回転		ナデ
国11-13	J-15	■		—	—	—	8.0	BL 斜位回転		ナデ
国11-14	AB-30	カクラン		—	—	—	3.2	BL 斜位回転		ナデ
国11-15	AB-30	カクラン		—	—	—	4.7	LR 斜位回転		ナデ
国11-16	AC-33	カクラン		—	—	—	7.3	BL 斜位回転		ナデ
国11-17	AC-33	カクラン		—	—	—	7.7	BL 斜位回転		ナデ
国11-18	AB-30	カクラン		—	—	—	5.2	BL 斜位回転		ナデ
国11-19	AC-33	カクラン		—	—	—	8.9	BL 斜位回転		ナデ
国11-20	AB-30	カクラン		—	—	—	6.8	BL 斜位回転		ナデ
国11-21	J-27	■		—	—	—	4.8	BL 斜位回転		ナデ
国11-22	AN-39	カクラン		—	—	—	11.6	BLK 斜位回転	内面：ナデ 距面：ナデ	

石器観察表

番号	器種	グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分類	備考	右翼
国11-23	石器	K-19	■	2.8	1.8	0.4	1.0	無茎・回基		珪質頁岩
国11-24	石器	B-23	■	(1.6)	1.5	0.4	0.9	無茎・平基		珪質頁岩
国11-25	G器	AA-30	櫻丸	(1.7)	(1.7)	0.4	0.8	無茎・回基		玉髓質頁岩
国11-26	G器	—	拂土	4.5	1.8	0.6	3.9	無茎・回基		珪質頁岩

第4章 まとめ

大開遺跡では、溝状土坑が5基、溝跡が2条確認された。出土遺物は極少量で、段ボール1箱にも満たず、遺構に伴うものはない。土器は縄文時代中期前半、中期後半、後期前半（十腰内I式）、晚期、晚期から弥生時代に属するものが出土した。石器は石鏃が4点出土したのみである。溝状土坑は、時期が確定できないものの、土層からは縄文時代前期中葉から晚期後葉までの時間的な幅の中でとらえられる。溝状土坑は、一般的に落し穴の用途が推測されているため、当該期に本遺跡は、狩猟場として利用されていた可能性が高い。それ以後は、時期不明の溝跡が2条構築されているに過ぎない。出土遺物も極少量であり、溝状土坑が構築されてから現在まで、居住の痕跡は確認されない。

以上のように遺構の密度が希薄な中において、相対的に多く確認されたのが溝状土坑である。そのため、ここでは溝状土坑の堆積過程について多少の考察を加えてみたい。これら溝状土坑は、多少の変異はあるものの、堆積過程に類似がみられる。この観察結果を踏まえて、第3号溝状土坑の短軸断面の状況を模式的に示す（図12）。

1. 第3号溝状土坑掘り込み時の状態

第3号溝状土坑内に最終的に堆積した土は第III層類似土であることから、第3号溝状土坑は第III層堆積時に埋まつたと考えられる。これを踏まえて、掘り込み時は堆積完了時と時間的に離れていないという前提に立つと、第3号溝状土坑の掘り込み時は第III層堆積時である。

2. 八戸火山灰第IV層の崩落土が堆積

軽石層である八戸火山灰第IV層が、まず崩落する。その結果、崩落部分がえぐられた形態になる。

3. 八戸火山灰第VI層と基本層序第V層の崩落土が堆積
軽石層である八戸火山灰第VI層が崩落する。その後えぐられた部分上部の基本層序第V層が崩落する。八戸火山灰第V層はよくしまる火山灰層であり、崩落する前に上部の崩落しやすい軽石層が崩落し、八戸火山灰第V層上面の高さまで埋めてしまったため、ほとんど崩落しなかつたと推測される。

4. 基本層序第V層の崩落土と第III層の崩落土、流入土が堆積

基本層序V層のオーバーハンプ部分がまず崩落し、断面形がV字形を呈し大規模な崩落が終わる。その後、第3号溝状土坑開口部の崩落が始まり、その結果、

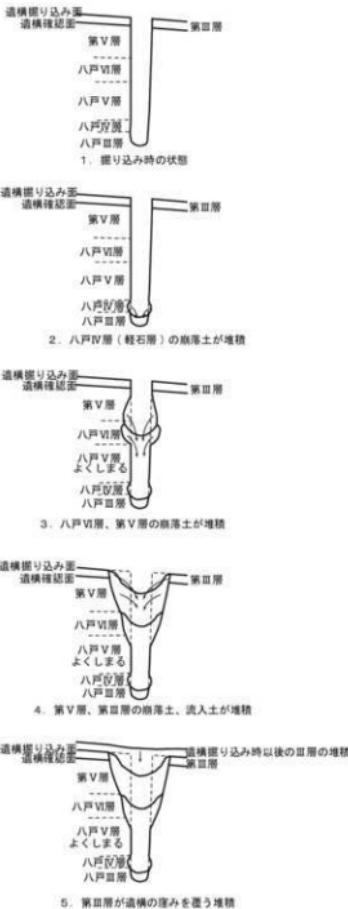


図12 溝状土坑埋没過程模式図

第Ⅲ層に伴い第V層が細かな塊状で崩落し、堆積する。V字状に開いているため、風雨などの自然營力によても当時地表面であった第Ⅲ層が遺構内に流入する。

5. 基本層序第Ⅲ層が遺構の底みを覆う堆積

4で遺構の肩まで埋まり、崩落が完了した後の堆積である。上記の堆積によって、底みとなった第3号溝状土坑を覆うように第Ⅲ層が堆積し、完全に埋まる段階である。

以上のように、第3号溝状土坑に類似した溝状土坑の堆積過程が、大開遺跡ではいくつか確認された。しまりのない軽石層が崩落し、その後軽石層の崩落によってオーバーハングした上部の地層が崩落する。その繰り返しを経たのち、大規模な崩落は、開口部がV字形に広がった形態、つまり重力に影響を受けない形になって終了する。その後、溝状土坑の掘り込み層である第Ⅲ層が流入し埋まる。
(岩田)

参考文献

内山真澄 1977 「第2章 札幌 S267, 268 の土壤群 一いわゆるTピットについてー」

『札幌市文化財団調査報告書 XIV』札幌市教育委員会 206-228頁



第1号溝状土坑土層堆積状況



第1号溝状土坑完掘状況



第2号溝状土坑土層堆積状況



第2号溝状土坑完掘状況



第4号溝状土坑完掘状況

写真図版 1



第5号溝状土坑土層堆積狀況



第5号溝状土坑完掘状況



第5号溝状土坑底面ピット断ち割り状況



基本土層(X-28 グリッド)

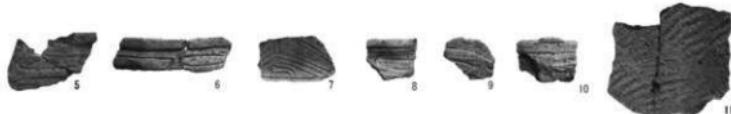


第1号溝完掘状況

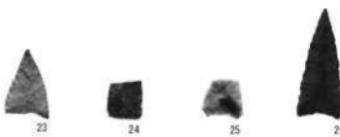
写真図版 2



第1号溝跡出土土器



道模外出土土器



道模外出土石器

第3編

新田遺跡

第1章 遺跡の層序

新田遺跡の平成10・15年度調査区は前述のとおり根城段丘に位置しており、現水田面との比高差は1～数mである。調査区北側の斜面から南流する埋没した沢地形が複数あり、遺構はこれらの沢地形によって区画された尾根上に位置する。尾根上の層序はほぼ共通するものの、谷の層序は必ずしも一致しない。

共通する部分についてはローマ数字を用いて共通しない部分はその都度別の記号を用いて記載する。

II M-129～II M-131 グリッド・II L-156～II L-157 グリッド等の尾根上では、以下の層序を確認した。

第I層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 草木根微量含む。

第II層 10YR1.7/1 黒色砂質シルト 十和田b浮石含む。

第III層 10YR2/1 黒色砂質シルト 中揮浮石を母材の一部とすると考えられる。

第IV層上半 10YR2/2 黒褐色砂質シルト ϕ 1～10mm の南部浮石を多量に含む。

第IV層下半 10YR3/4 暗褐色シルト ϕ 1～20mm の浮石を微量含む。

ただし、新田遺跡の調査区は畑地造成のためほぼ全面にわたって削平を受けており、これらの土層を確認できなかった地点も多い。

谷部ではおおむねこれに対応すると考えられる土層と地点毎に独自な土層がみられた。尾根部の土層に対応すると考えられるものでも細分できる場合が多かった。地点毎に独自な土層の詳細は次頁の土層注記を参照されたい。

II F-156 グリッド～II G-157 グリッドでは以下の層序を確認した。

第Ia層 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 草木根含む。

第Ib層 10YR1.7/1 黒色シルト ピニールを含む。

第IIa層 10YR2/2 黒褐色シルト ϕ 30mm の礫を含む。陶磁器が出土し、人為的な造成土の可能性が高い。

第IIb層 10YR3/4 暗褐色シルト ϕ 1～20mm の浮石を微量含む。

第IIc層 10YR1.7/1 黒色シルト

第IId層 10YR6/6 明黄褐色火山灰 白頭山火山灰

第IIe層 10YR7/4 にぶい黄橙色火山灰 十和田a火山灰

第IIif層 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト ϕ 7mm の十和田b軽石 15%。

第III層 10YR1.7/1 黒色シルト 砂微量含む。

第A層 10YR2/3 黒褐色砂 シルト含む。

第B層 10YR2/3 黑褐色粘土質シルト 砂多量含む。

第C層 10YR2/3 黑褐色砂質シルト

第D層 10YR2/2 黑褐色砂

土質や火山灰の存在から尾根部の第II層・第III層に相当すると考えられる土層は各地点で確認され、第III層は細分されない場合が多い。第III層下には水性堆積による土層が複数認められる。その下位には段丘礫層が認められた。16～18層は八戸火山灰層の一部と思われ、段丘礫層の直上に堆積することが確認できた。

(中村)



図 13 基本土層

第2章 検出遺構とその遺物

新田遺跡で検出された遺構のうち、本書で報告するのは第1号土坑（SK-01：平成10年度調査）、第1号不明遺構（SX-01：平成10年度調査）、第2号不明遺構（SX-02：平成15年度）、第1号溝（SD-01）である。

第1号土坑 [SK-01] (図14)

〔位置と確認〕 II 0-161 グリッドに位置する。周辺は削平を受けており、第V層で第IV層下部に類似する暗褐色土の落ち込みを確認した。表面観察では遺構であるか否かの判断が難しかったので半截したところ、略完形の土器が出土し遺構と認識した。

〔規模・形状〕 上端で 1.06m × 0.93m、底面は径約 0.50m で、断面形は皿状である。

〔堆積土〕 2層に分層した。壁・底面と堆積土の境界は漸移的で、掘りすぎた部分が多い。

〔出土遺物〕 底面から土器が潰れずに出土した。土器の出土状況から考えて、土坑の埋め戻し時に置かれたものと考えられる。土器は口縁部と底部を欠く。器厚は 5mm である。胴部下半の形状から考えて底部は尖底になるものと考えられる。底部から外傾して立ち上がり、胴部下位でやや屈曲する。口縁部はやや外反する。外面はごく浅い条痕が右下—左上の方向に施される。内面は下部の 1/5 を除いて条痕調整後軽いナデ調整が施されている。内面のナデ調整は条痕をすべて消すほど強くなく、土器製作工程上やむを得ず内面に手を添える等の要因で生じた可能性も考えられる。条痕の単位は 4 条 1 単位で、幅 15mm である。1 条の幅・条の間隔は、2 ~ 3mm でほぼ均等で、溝底は平坦である。条が浅いため、工具の断面形状ははっきりしないが、条の形状から考えて二枚貝の条痕と考えられる。胎土には纖維を全く含まず、鉱物粒や 1mm 以下の岩片が目立つ。これらの特徴から縄文時代早期中葉の吹切沢式前後の土器と思われる。

〔時期〕 縄文時代早期中葉と考えられる。

(中村)

第1号不明遺構 [SK-01] (図16)

II K ~ II N の 130 ~ 132 グリッドに位置する。第IV層中で、礫が比較的まとまって出土した。付近は平坦で、水流を示すような砂の堆積ではなく、自然落力で運搬されたものとは考えられない。周辺からは土器がほとんど全く出土せず、通常の遺物の出土状況とは異なると考えられたので、作図を行

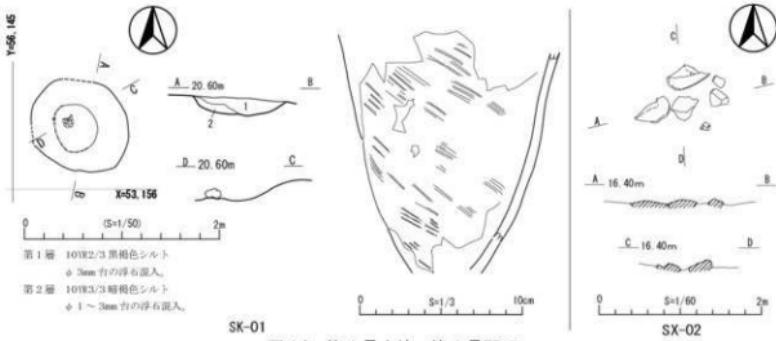


図14 第1号土坑・第1号配石

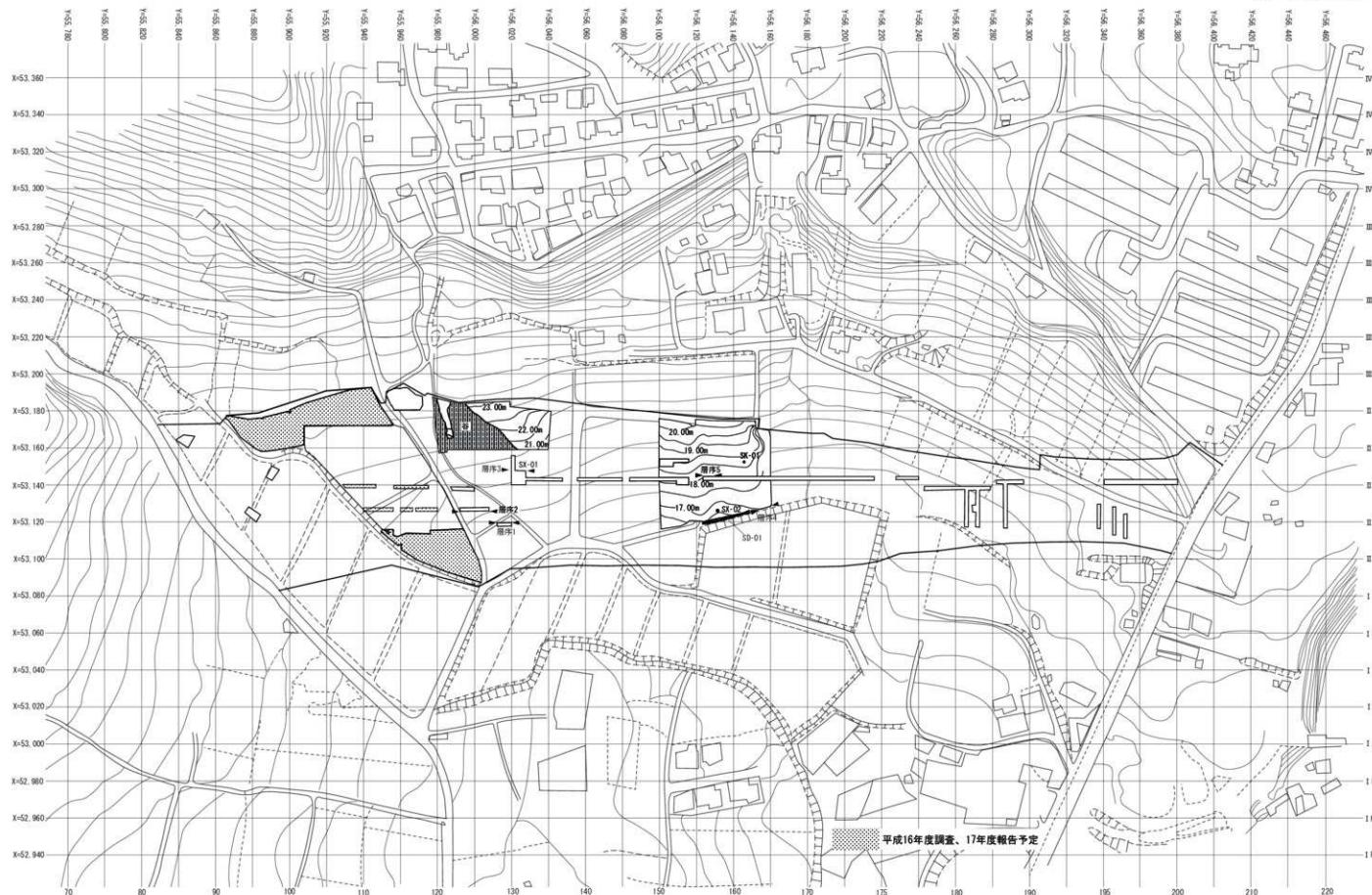


図 15 遺構配置図 (S=1/2,000)

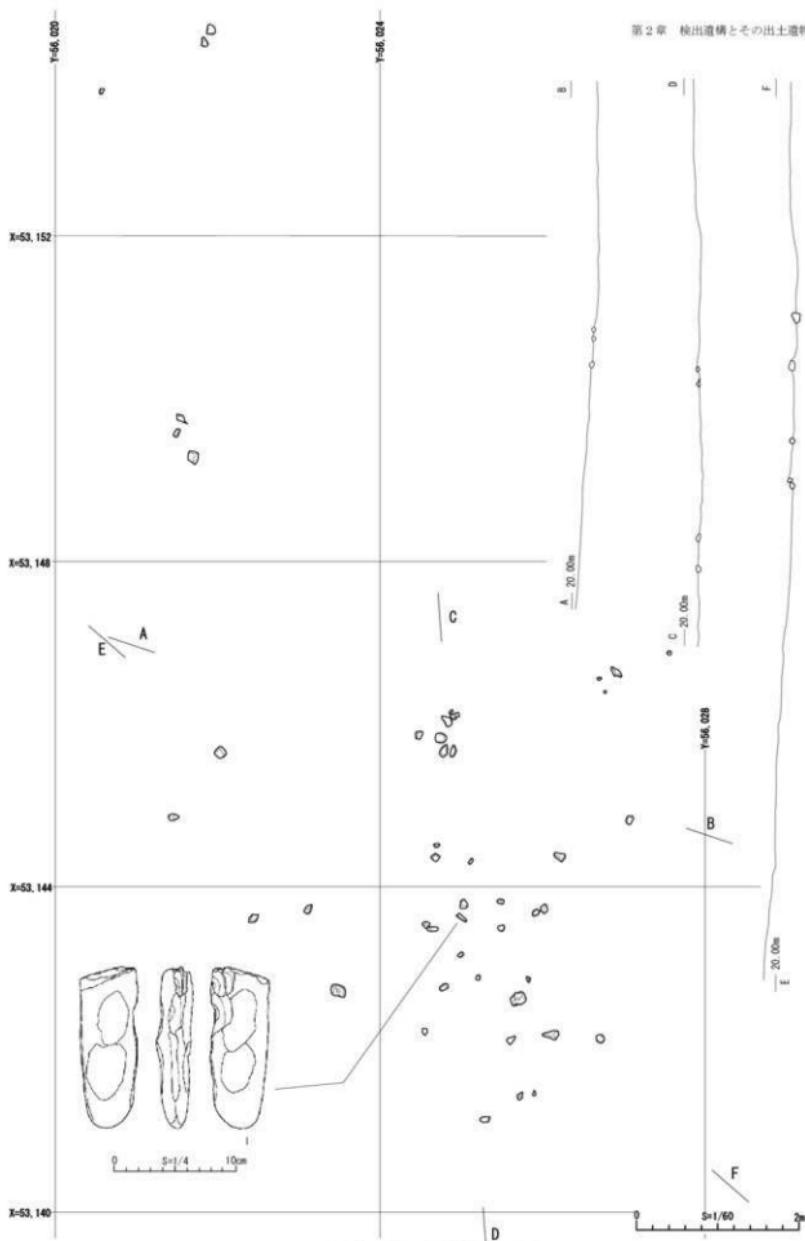


図 16 第1号不明遺構 (SX-01)

SX-01 出土石器観察表

図番号	取上番号	記種	グリッド	層位	X	Y	Z	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重錠(g)	分類	備考	石質
国16-1	9-34	縄繩石	II K ~ II N, 130 ~ 132	III	-	-	-	13.2	4.9	3.0	216.6			砂岩

った。多くは自然縞であるが、凹み石が1点ある。縞は最大で20×20cm、最小で5cm程度、10~15cm程度の掌に収まる程度のものが多い。焼け縞は含まれていない。時期は検出層位から縄文時代早期と考えられる。

(中村)

第1号配石造構【SX-02】(図14)

II G-158 グリッドに位置する。第IV層中で、縞の集中を検出した。現地では赤変したかと思われる縞が含まれていたため炉の可能性も考えて掘り下げを行ったが、焼土・炭化物は確認できず、配石造構とした。

赤変した縞は鉄分の沈着によるものであった。縞は、最大で25×35cm、最小で10×10cm程度である。掘り方は確認できなかった。

周辺からは赤御堂式土器、早稻田5類土器が出土したが、配石内からは出土していないので詳細な時期は不明である。検出層位からは縄文時代早期後半~前期前半と考えられる。

(中村)

第1号溝跡【SD-01】(図17)

II E・II F-155~163 グリッドに位置する。第II層を掘りこんで構築されている。検出面での幅は1.3m以上であるが、法面保護のため全面を調査できなかった。現水田の法面上端にはほぼ平行しており、水田法面の造成時期に近いものと推測される。

(中村)

SD-01
第1層 10YE2/1 黒色砂質シルト、I a層
第2層 10YE2/2 黒褐色シルト、I b層
第3層 10YE2/3 黒色シルト、十和田b浮石10%、II層 一部粘土質である。
第4層 10YE2/3 黑褐色砂質シルト、カクラン
第5層 10YE2/1 黒色シルト、十和田b浮石5%、II層、
第6層 10YE2/1 黒色シルト
第7層 10YE2/1 黒色砂質シルト、十和田b浮石含まない。重錠の崩落土と思われる。

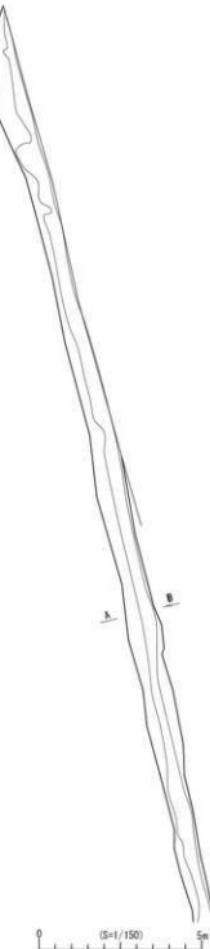
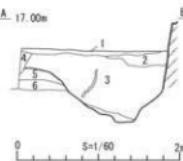


図17 第1号溝跡(SD-01)

第3章 遺構外出土遺物

平成10・15年度の調査出土遺物のうち、整理対象となったのは土器1018片(6306.6g)、自然礫を含む石器530点(32129.1g)である。図21に平成15年度調査の遺物出土状況を示した。大部分はII F～II K-155～160の範囲に集中している。

第1節 土器(図18～19)

平成10・15年度調査で出土した遺物は、縄文時代草創期の可能性のあるもの・早期・前期・中期・晩期～弥生時代・古代の各時期のものがある。古代のものは擾乱土層から小破片が出土しただけであり、図示しなかった。以下にその類別を示す。

第1群土器 爪形刺突のある土器(1～12)

口唇部前面にはヘラ状の工具により左右から刻みを入れ、刻みの間には粘土粒が盛り上がる。口縁部には同様の工具で左上から右下方向に向かって浅い刺突(爪形文)が2段ないしはそれ以上施される(1)。文様帶下端では爪形文は上から下方向にむかって2段施される(2・3)。3では左上から右下方向の刺突と上から下への刺突の両方が観察できる。胴部は無文となるようである。外面・内面ともナデ調整が施される。胎土には金雲母は含まない。器厚は極めて薄く、平均3～4mmである。

第2群土器 物見台式に比定される土器

2条1單位の沈線(13)の屈曲部に先端のとがった棒状工具で、刺突が施される。沈線の脇には平行して貝殻腹縁による刺突文が施されている。

第3群土器 ムシリI式土器(14～21)

口縁部は平坦である。外面には幅4～6mmの条痕が施される。内面にも施され、その痕跡を残すものも多い。胎土は稀に金雲母を含み、微細な鉱物粒子が目立つ。繊維は含まない。器厚は6mm以下で、4群や5群に比べて薄い。

第4群土器 早期後葉から末葉の土器(22～33)

口唇部は指頭による押圧が連続して施される(23)。胴部はLRあるいはRLの斜縄文が施され、羽状に配置されるものもある(25・29・31)。内面は指頭押圧が目立ち、条痕の痕跡を残すものがある(24)。胎土は繊維を多量に含み、凝灰岩か浮石と思われる白色の細粒が目立つが、鉱物粒は目立たない。本群は早期後葉から末葉にかけての土器と思われるが、口唇部の装飾や、早稻田5類土器に特徴的な綾状縄文を含まないことから赤御堂式に比定されると思われる。

第5群土器 上記以外の縄文時代早期に含まれるが、型式の比定が困難なもの(34)

内外面とも幅1mmの細く浅い条痕が施される。内外面とも色調は褐色で、3群に比べて明るい。吹切沢式前後の土器かとも思われる。

第6群土器 円筒式土器に属するもの(33～41)

第7群土器 縄文時代中期後葉～後期初頭に属するもの(42～46)

42～44は中期末葉の大木10式平行期のものと考えられる。46は底部破片で、外底面には刺突円形に施されている。

第8群土器 縄文時代晩期～弥生時代に属するもの(47～55)

53は内面にも沈線が施されている。54は注口土器の体部破片で、屈曲部に貼り付けられた隆帯に刻みが施される。56は条の密接した縄文が縱走する。弥生時代のものと思われる。(中村)

第2節 石器（図19・20）

石鎌は、無茎・平基、無茎・凹基、尖基がある。いずれも扁平なものである。64は、基部が欠損している。

石匙はいずれも縦形で65は先が尖る。

67・68は石箒で69は搔器である。

70は削器であり、刃部として加工されているのは端部から側縁にかけての一部分のみである。よって上部が欠損しているように見えるが、最初からこの大きさで使用していたものと推測される。

71は、形態から磨製石斧の未製品とした。

72・73は磨製石斧である。72は片面のみ研磨し、もう片面は調整剥離のみである。73は、ほぼ全面研磨しているが、調整剥離痕が側縁に數カ所残されている。

磨石は4点図示した。75は他の磨石に比べて磨り面の幅が狭い。磨り面の側縁部に打ち欠きのような痕跡が見受けられるものがあるが、人為的に打ち欠いたものなのか、磨っている際に欠けたもののかは不明である。しかし、今回、報告した磨石に限っていえば、割れ方が不規則であるという理由から、後者の磨っている際に欠けたという可能性が高い。

(岩田)

第3節 陶磁器（図20）

78～83は陶磁器である。78～82は染付である。いずれも18世紀～幕末にかけてのものと思われる。

(中村)

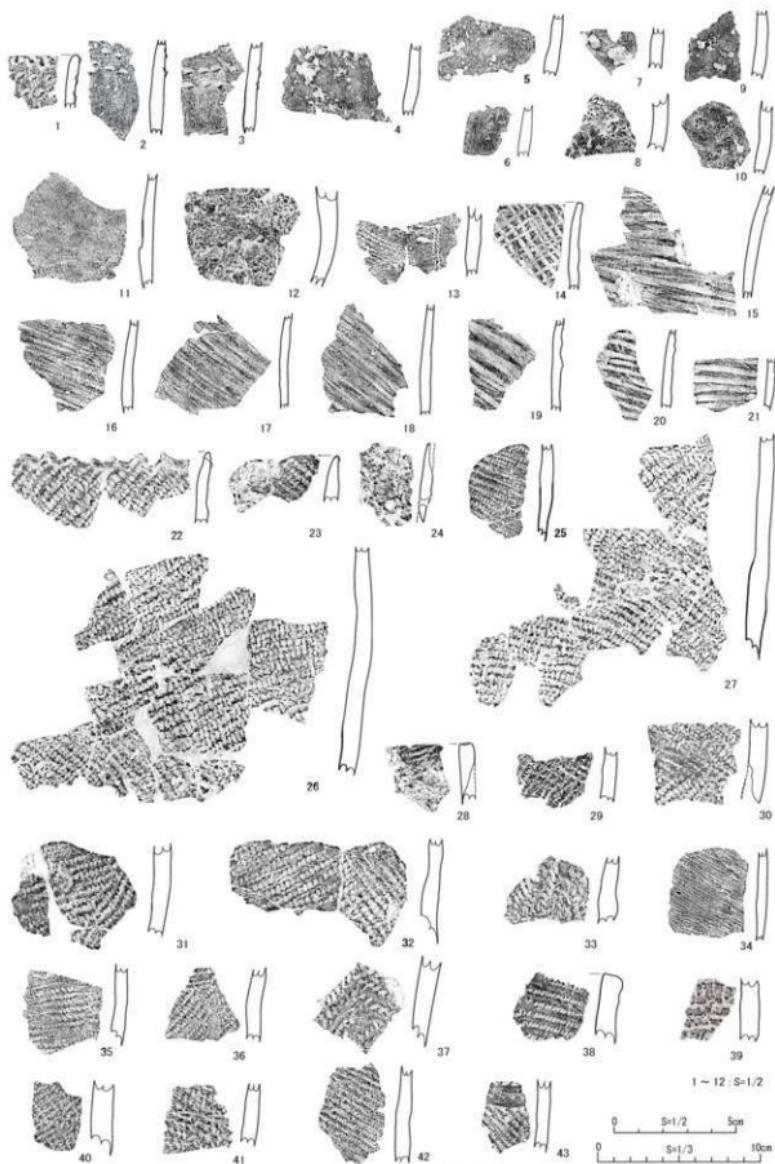


図 18 造構外出土遺物 (1)

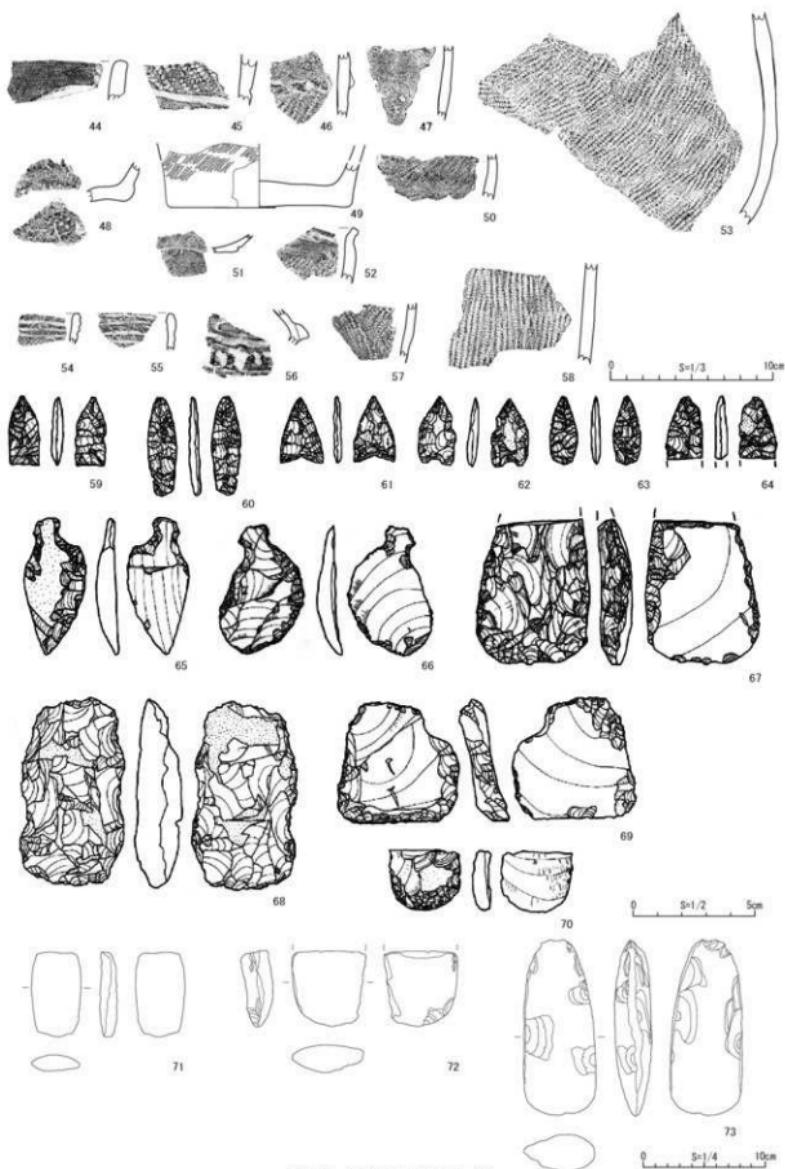


図 19 遺構外出土遺物 (2)

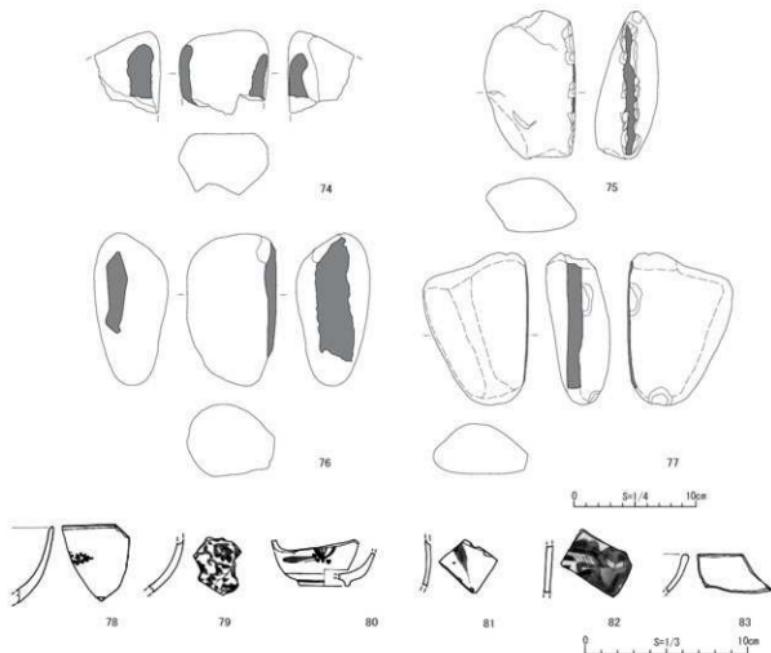


図20 遺構外出土遺物(3)

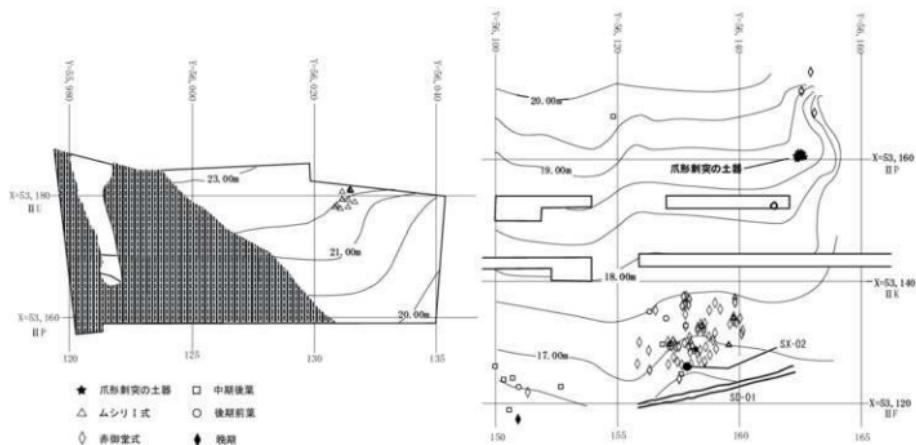


図21 遺物分布図 (S=1/800)

遺構出土土器土器観察表

遺構番号	地主番号	下限	層位	重量	時期	部位	外文文様	内面調整	備註	
18-1 P130-3		V	2.4		草創期～早期	口縁部～口縁部	口縁部方向の爪形刻突・爪形刻突	ナデ	含	
18-2 P129		V	4.9		草創期～中期	口縁部～脚部	爪形刻突	ナデ	含	
18-3 P125		V	5.3		草創期～中期	口縁部～脚部	爪形刻突	ナデ	含	
18-4 P123		IV	7.6		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-5 P122		IV	5.8		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-6 P130-2		V	2.6		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-7 P128-1		V	2.1		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-8 P120-1		V	1.6		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-9 P124		IV	3.7		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-10 P126		V	4.5		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-11 P121		V	12.5		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-12 P127		V	7.1		草創期～中期	脚部	ナデ	ナデ	含	
18-13 P40 732		III + IV	204.4		物見石	脚部	足底斜線文・沈線文・刻文	ナデ	無	
18-14 P5	II K-172	III	14.4		ムシリ I	口縁部～口縁部	条板	条板・捺押さえ	無	
18-15 PE35 244 245		III + IV	49.5		ムシリ I	脚部	条板	ナデ	無	
18-16 P246		III	23.9		ムシリ I	脚部	条板	ナデ	無	
18-17 P248 249-2		IV	23.5		ムシリ I	脚部	条板	条板	無	
18-18 P241-2		IV	26.1		ムシリ I	脚部	条板	条板	無	
18-19 P236		IV	14.2		ムシリ I	脚部	条板	ナデ	無	
18-20 P5	II K-172	III	10.3		ムシリ I	脚部	条板	条板	無	
18-21 P5	II G-196	I	8.2		ムシリ I	脚部	条板	条板	無	
18-22 P114 115		III	45.9		歩脚堂	脚部	口縁部～脚部圧痕による波状口縁	口縁部：II 横位	ナデ	含
18-23 P36		IV	11.2		歩脚堂	口縁部～口縁部	口縁部・捺押圧痕による波状口縁	II 横位	ナデ	含
18-24 P59		IV	11.1		歩脚堂	脚部	II 横化	ナデ	含	
18-25 P137		III	16.6		歩脚堂	脚部	II 横化	ナデ	含	
18-26 P96 97 100 101 106 107 108 109 111 112 113 117		III + IV	136.6		歩脚堂	脚部	II 横位 + III 横位	ナデ	含	
18-27 P82 83 84 88 104 105 745		IV	94.9		歩脚堂	脚部	II 横位 + III 横位	ナデ	含	
18-28 P20		IV	9.9		歩脚堂	口縁部～口縁部	口縁部・脚部圧痕による波状口縁	II 横位	ナデ	含
18-29 P5	II K-180	IV	7.6		歩脚堂	脚部	II 横化 + III 横化	ナデ	無	
18-30 P99		III	28.1		歩脚堂	脚部	II + III 横位	ナデ	含	
18-31 P65		IV	45.0		歩脚堂	脚部	II 横位	ナデ	含	
18-32 P45 729		IV	100.2		歩脚堂	脚部	II 横化 + III 横化	ナデ	含	
18-33 P5	II G-196	I	23.7		歩脚堂	脚部	II 横位	ナデ	含	
18-34 P11		IV	19.3		早期中盤	脚部	条板	条板	無	
18-35 P61		III	20.5		前期末	脚部	II 横位	II 横位	含	
18-36 P142		III	17.1		前期末	口縁部～脚部	口縁部～脚部	II 横位 + III 横位	ヒガキ	無
18-37 P1	II K-192	I	27.6		円筒上層a	口縁部	耳面部圧痕による平行斜文	ナデ	無	
18-38 P43		III	23.5		円筒上層a	口縁部～口縁部	単輪軸条体1輪(II)圧痕による平行斜文	ヒガキ	無	
18-39 P44		III	14.4		円筒上層a	口縁部	側面圧痕による平行斜文と脚位斜文	ヒガキ	無	
18-40 P69		III	23.3		中期前盤	脚部	II 横位	ヒガキ	無	
18-41 P5	II K-174	III	18.5		円筒上層a	脚部	II 横位	II 横位	無	
18-42 P5	II K-129	II a	24.9		円筒下層d	脚部	II 横位	ナデ	無	
18-43 P5	II K-180	II b	14.3		前期末	口縁部～脚部	口縁部～脚部	II 横位 + III 横位	ナデ	無

出番号	取上番号	Y' (T' z')	層位	重量	時期	部位	外面文様	内部調査	備考
19-44	P5	II K-179	I	17.4	大木10式平行縦	口縫底～口縫底	底	ナゲ	無
19-45	P5	II K-179	I	18.0	大木10式平行縦	網底	丸模 1E 構造	ナゲ	有
19-46	P5	II K-166	I	16.2	大木10式平行縦	網底	底舟上加丸 1E 構造	ナゲ	無
19-47	P5	II K-174	Ⅲ	12.9	中期末葉	網底	ナゲ	ナゲ	無
19-48	P5	II K-158	I	16.6	中期末葉	底底	底面斜張	ナゲ	無
19-49	P5	II K-174	Ⅲ	278.1	中期末葉	網底～底底	1E 構造	ナゲ	無
19-50	P5	II K-183	Ⅲ	15.3	晚期	網底	1E 構造	ナゲ	無
19-51	P5	II K-161	I	5.0	晚期	網底～底底	1E 構造	ナゲ	無
19-52	P5	II G-192	I	8.9	晚期	口縫底～底底	口縫底 2E 丸、網底 1E 構造	ナゲ	無
19-53	P1-2			178.9	晚期	網底	1E 構造	ナゲ	無
19-54	P5	II K-158	I	4.0	晚期	口縫底～網底	口縫底 平行波綱	ナゲ	無
19-55	P5	II K-172	Ⅲ	4.9	晚期	口縫底	口縫底 平行波綱	口縫底 平行波綱	無
19-56	P5	II N-152	I	9.6	大須C1	網底	字式斜張丸 裂形文	ナゲ	無
19-57	P5	II F-92	I	8.1	晚期～弥生	網底	1E 構造	摩滅	無
19-58	P122			41.7	晚期～弥生	網底	1E 斜位	ミガ今	無

遺構外出土石器觀察表

出番号	取上番号	グリット	層位	底底	X	Y	Z	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	分類	備考	石質
19-59	27	II W-157	IV	石底	53129.331	56124.627	16.524	2.9	1.2	0.5	1.4	無基・平基	桂賀貝岩	
19-60	125	II G-161	Ⅲ	石底	53125.144	56144.652	16.276	4.0	1.2	0.4	1.8	尖基	桂賀貝岩	
19-61	221	II Q-131	IV	石底	53181.658	56025.304	22.260	2.7	1.7	0.3	1.0	無基・凹基	桂賀貝岩	
19-62	135	II G-158	IV	石底	53127.567	56123.394	16.360	2.8	1.5	0.4	1.5	無基・凹基	桂賀貝岩	
19-63	167	II F-150	Ⅲ	石底	53129.622	56160.237	15.842	2.8	1.1	0.4	0.9	尖基	桂賀貝岩	
19-64		II K-136	I	石底	—	—	—	2.6	1.5	0.5	1.9	基部欠損	桂賀貝岩	
19-65		II K-109	II b	石底	—	—	—	5.6	2.5	0.8	10.2		百岩	
19-66		II K-100	V	石底	—	—	—	5.3	3.5	1.1	10.8		沢出土	百岩
19-67		II F-190	I	石底	—	—	—	(6.0)	4.6	1.4	40.1		桂賀貝岩	
19-68		II J-117	II	石底	—	—	—	7.0	4.3	1.9	68.9		百岩	
19-69		II K-172	II b	縫隙	—	—	—	5.0	5.0	2.0	5.7		桂賀貝岩	
19-70		II J-190	I	縫隙	—	—	—	2.4	2.9	0.8	24.5		百岩	
19-71	43	II G-156	IV	磨製石斧	53121.733	56124.571	16.371	6.9	4.1	1.3	53.7	脚跡		
				未製品か										
19-72	196	II F-151	III	磨製石斧	53123.905	56104.372	16.406	(6.2)	(6.0)	(2.3)	133.4	脚跡		
19-73	496	II R-162	IV	磨製石斧	53173.967	56151.414	19.705	4.5	5.9	3.0	374.0	脚跡		
29-74	80	II I-158	IV	磨石	53134.723	56126.161	16.881	(6.9)	7.4	5.0	205.6	砂岩		
29-75	75	II I-158	IV	磨石	53122.953	56123.223	16.606	12.2	7.5	4.5	516.7		桂賀貝岩	
29-76	237	II Q-128	III	磨石	53166.512	55997.019	21.623	12.4	7.4	5.9	722.9		安山岩	
29-77	123	II P-156	IV	磨石	53162.312	56123.866	19.107	12.4	8.6	4.1	631.5		砂岩	

遺構外出土陶磁器觀察表

出番号	取上番号	Y' (T' z')	層位	重量	時期	種別	備考
29-78	P-X	II B-158		10.4	18C～既未	盆付	
29-79	P-X	II C-124		7.2	18C～既未	盆付	
29-80	P-X	II L-161		17.2	18C～既未	盆付	
29-81	P-X	II Q-116	カクラン	4.6	18C～既未	盆付	
29-82	P-X	不明		8.6	18C～既未	盆付	
29-83	P-X	II M-100	カクラン	5.2	18C～既未		

第4章まとめ

新田遺跡の平成10・15年度の調査で確認された遺構は次の通りである。

縄文時代早期

土坑 1基 不明遺構 1基 配石 1基

時期不明

溝跡 1条

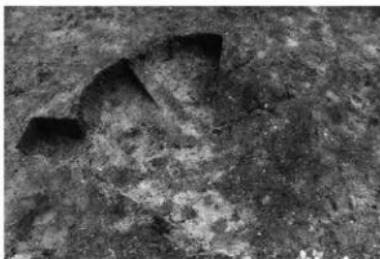
出土した遺物は縄文時代早期を中心とし、縄文時代の各時期、弥生時代、古代、近世の各時期のものがある。調査区は削平を受けた部分が多く、安定した層位から出土したのは縄文時代早期のものである。それ以外のものは量的にも極めて少ない。

遺構・遺物の状況から、新田遺跡の平成10・15年度調査区は縄文時代早期に散発的に利用されたあと、あまり利用されることはないものと考えられる。縄文時代早期には土坑と配石、不明遺構が検出されたが、その用途について積極的な論を展開するだけの情報に乏しい。ここでは、居住痕跡を伴わない活動の場であった事を指摘しておきたい。

出土遺物の中で、第1群土器について触れておきたい。第1群土器は外面に爪形文が施される。器壁が3～4mmと薄く、内外面はすべてナデ調整である。ヘラ状の工具により爪形刺突が施され、粘土の盛り上がりが生じている。爪形文は口縁部上辺に二段ないしはそれ以上、それとは間隔を開けて、文様帶下端に二段が施される。このような特徴はこれまで知られている草創期の爪形文とは異なり、早期の白浜式に類似する。しかし、白浜式は一般的にもっと厚く、無文部の調整はミガキ調整が一般的であり、本群土器とは大きく異なる。出土層位は第V層である。埋没谷の落ち際であるため、土壤の移動はあるかもしれない。そのため、確実に草創期の層準から出土したとはいえないが、器壁の薄さは縄文時代草創期の土器につながる属性であり、時間的な位置づけは白浜式より遅れる可能性もある。ここでは、草創期から早期白浜式までの時間幅の中に取まるものととらえておきたい。（中村）



第1号土坑土层堆积状况



第1号土坑完掘状况



第1号土坑遗物出土状况

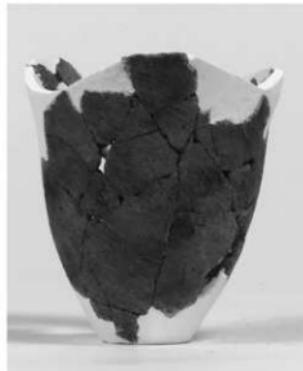


第1号不明道模核出状况

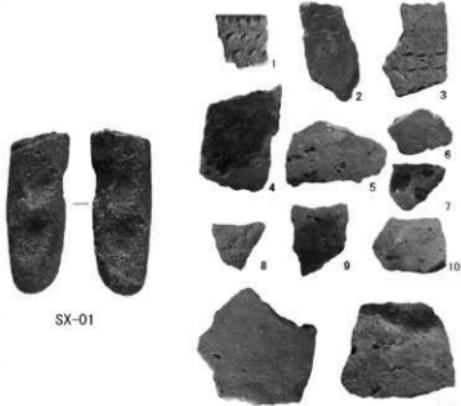


第1号配石道模核出状况

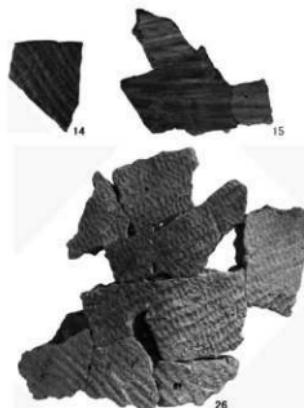
写真图版 1



SK-01 出土土器



SX-01



写真図版 2

報告書抄録

ふりがな	おおびらきいせき・しndeんいせき							
書名	大開遺跡・新田遺跡							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
リード番号	第384集							
編著者名	中村 哲也 岩田 安之							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2005年3月7日							
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡 番号	旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
				北緯	東經			
大開遺跡	青森県八戸市大字妙字大開9-24、外	0203	03177	40° 28' 28"	141° 33' 36"	20020418	~	八戸南環状道路建設事業に伴う事前調査
				40° 28' 37"	141° 33' 23"	20020530		
新田遺跡	青森県八戸市大字是川字新田8-6、外	0203	03141	40° 28' 40"	141° 29' 25"	20020801	~	5,000 m ²
				40° 28' 29"	141° 29' 25"	20021023		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大開遺跡	散布地	縄文時代		溝状土坑 5基		土器・石器		
新田遺跡	散布地	縄文時代(草創期・早期・前期・中期・後期・晚期)・古代	土坑 1基 (縄文時代早期)	組石遺構 1基 (縄文時代早期)		土器・石器	爪形刺突のある土器片出土	

青森県埋蔵文化財調査報告書第384集 大開遺跡・新田遺跡

—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2005年3月7日

発 行 青森県教育委員会
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702

印 刷 不二印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦1-10-16
TEL. 017-741-5439
